

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：38002

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780437

研究課題名(和文) 人生の最期に向かう沖縄戦体験者との「見える物語綴り法」の共創に関する探索的研究

研究課題名(英文) An Exploratory Study on the Co-creation of "Visualization of Personal History" with Okinawa War Survivors towards the End of Their Lives

研究代表者

吉川 麻衣子 (YOSHIKAWA, Maiko)

沖縄大学・人文学部・准教授

研究者番号：80612796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦時に住民を巻き込む地上戦が展開された沖縄には、当時の体験の記憶に苛まれている人びとが多い。先行研究で、「自分の体験や想いを見える形で後世に残したい」というニーズがあることが明らかになり、本研究では、体験者の自発的な語りに沿った映像や写真を用いて、自分史を整理する方法の開発に取り組んだ。3年間の研究期間で、20名と延べ1,112回実践を重ねた結果、単なる自己語りよりも視覚媒体を併用する方が、高齢の語り手にとって満足できる時間となることが示唆された。この方法は、高齢者心理臨床の現場での活用が期待できるため、今後さらに検討を続ける。

研究成果の概要(英文)：In Okinawa, where many residents were victims of the ground battle during World War II, many people have been tormented by memories of their experiences during that time. There is an apparent need to "share one's experiences and feelings with future generations." Therefore, this study explores methods of organizing personal history, using images and photos in conjunction with the spontaneous narrative of the experiences. The study was conducted over a period of three years with 20 persons, and during that period, a practice session of the narration had been repeated a total of 1,112 times. Results suggest that rather than simple autonomous narrative, combining it with visual media leads to a more satisfactory outcome for the elderly narrators. This study is still in its infancy and should further examine this subject in the future.

研究分野：臨床心理学

キーワード：戦争体験者 沖縄戦 見える物語綴り法 共創 ナラティブ ライフヒストリー 心的外傷後成長 地域援助

1. 研究開始当初の背景

(1)1997年に着手した沖縄戦体験者との研究・臨床活動・予備的研究が、本研究の問題提起の背景である。これまでに、沖縄戦体験者の戦争による心理的影響は甚大であり、戦争体験の記憶により心理的不調を抱えている者の比率は、関東近郊の高齢者を対象とした長田・長田(1998)と比べて高いことが明らかになっている。特に、「戦時中の夢を見て眠れない、うなされる」、「銃声のような破裂音がすると身体がすくんで動けなくなる」、「家族(友人)が傍らで撃たれて犠牲となった映像が浮かぶ」などの項目において顕著であった(吉川・田中, 2004 ほか)。

(2)2005年より、沖縄県内7地域(離島地域を含む)において、臨床心理的地域援助として「沖縄戦の体験を語らう会」を実践してきた。各地域8~12名で構成された会には、「戦争体験を安心して語り合える場が欲しい」というニーズを持つ人びとが集った。それまで心の深奥に閉ざしてきた自らの戦時体験や感懐を個々のペースを大切にしながら分かち合ってきた。しかし、その実践の途中で逝去する方が増え、語り合う場や相手を再び失いつつある現状の中、参加者のニーズにも変化が生じてきているのではないかと感じていた。

(3)あらためて、「語らう会」参加者のニーズを把握する調査を実施したところ、人生の最期に向けて「自分史をまとめたたい」「私の物語を良いも悪いもなくゆっくり聴いて欲しい」「見える形で自分の歴史をふり返り、体験と想いを後世に残したい」というニーズが明らかになった。

(4)高齢となった沖縄戦体験者の多くは高齢者福祉施設で暮らしている。しかし、高齢者施設職員には、「(戦争)体験を泣き出しながら話す利用者の話をどこまで深く聞いていいのかわからない方がいいのか、楽しい話に誘導した方がいいのか、戦争体験を全く話さなかった方が突然話し出した時にどう対応していいのかわからない」という戸惑いがあることが明らかになった。また、認知症の影響で、言語だけでは記憶の想起が難しい方でも、映像や写真が補助的にあれば生き生きとした表情で話ができる方が多いという報告もあった。

2. 研究の目的

(1)人生の最期に語られるナラティブは、その人の実存に関わる内容が語られやすい。個々の語りを丁寧に聴き受け整理していくことは、人生の集大成における心理支援となり得ると考える。そこで本研究は、沖縄戦体験者の自発的な語りを主軸として、「見える形で」自分史を整理できる方法(映像や写真、絵を用いた方法)を開発し、その効用について探

索的に検討することを目的とした。

(2)もがき苦しみながらも過酷な境遇を乗り越え成長していく事象である「心的外傷後成長(Posttraumatic Growth: PTG)」の側面に焦点化して物語ることによって、気持ちの収めどころが見つかっていく可能性があると考えられる。しかし、あまりにも衝撃的な体験であったために記憶が断片的になり、語りも途切れがちである。視覚媒体も用いて補いながら、体験によって引き起こされた外的・内的な数々の変化を紡ぎ合わせる作業を行っていくことを試みる。ただし、語り手へ心理的負担が及ばないように十分配慮する必要がある。

(3)十数年、研究を共にやってきた沖縄戦体験者が次々と逝去される場面に接し、ここ数年のうちにはしか取り組むことができない課題であるとともに、今、ここ沖縄において取り組むべき臨床心理的地域援助課題である。

(4)将来的には、戦争体験世代の高齢者の「看取り」に携わる分野への波及、戦争体験の継承のあり方が課題となっている「平和教育」の分野への波及、更には、震災後の人生を歩む方々の長期的な心理支援に関する応用的知見が得られるのではないかと考える。

3. 研究の方法

研究期間内に4つのサブテーマ(6研究)について明らかにした。

(1)戦争体験を「語ることの意味」の概念的検討：語り手の自発的な語りを主軸とした実践研究であるため、そもそも「戦争体験を語ること」にはどのような意味があるのかを2つの方法で検討。

文献研究：国内外の文献から「戦争体験を語ることの意味」に関する記述を抽出し、理論的枠組みを作成する。

データの再分析：「沖縄戦体験を語らう会」参加者で、「語ることでよかった」という方(7名)の記録を「語ることの意味」に焦点化し再分析する。

(2)「語ることの意味」と関連要因との検討およびニーズ把握：「沖縄戦体験を語らう会」参加者77名に対して、「語ることの意味」と関連要因(PTG、沖縄の精神文化)について質問紙調査を実施。その際、「見える物語綴り法」に対するニーズ(希望者)も募る。

(3)「見える物語綴り法」の共創：実践希望者個々のニーズに沿い、自分史づくりを行う。映像や写真、絵など本人が使用したい視覚媒体も用いて語りを綴る。

(4)「見える物語綴り法」の効用に関する実証的検討：本人と家族の視点から、本実践の効

用を検討。

本人への面接調査：研究期間内に実施できた方に対し、「見える物語綴り法」を実施してみて感じたことや変化について聞く。

家族への面接調査：本人が気づくことができない日常に波及する効用・変化について聞く。

4. 研究成果

(1)戦争体験を「語ることの意味」の概念的検討

文献研究：1997年から収集を開始した沖縄戦体験者に関する文献・資料の中から、412の記述を抜粋する作業を行った。その結果、「沖縄社会からの平和の発信（歴史・社会的意義）」、「自己語りの一側面（個人的意義）」、「後世に伝える役目、語り残さなければならない（世代間伝承）」が主な要素となることが示唆された。

データの再分析：「沖縄戦体験を語らう会」への参加を重ねるにつれて感懐を語るようになっていった7名の語りデータを再分析したところ、「自らと同じような想いを、二度と誰にも経験して欲しくないことを次世代に伝えたい」という意味が付与された語りももっとも顕著であった。また、「語ることへの怖さ（記憶の再現、情緒不安定、受け止めてもらえなさ）」は、語り続けるにつれて低減していくとは限らない。つまり、語りを重ねても「怖さ」は無くなるものではない。それでも彼らが語り続けるのは、「死ぬ前に自分の人生を整理したい（意味を持たせたい）」という意思によるものであり、それは、高齢期の発達課題である人生の統合へと向かう心的作業の一部なのではないかと推察された。

(2)「見える物語綴り法」の実施希望者の状況と実施上の工夫：「語らう会」参加者77名中50名が希望した。当初の予定よりも希望者が多かったため、個別面接を行い、ニーズの聴き取りと実施可能性を検討した。研究期間内では、個別対応の要望が特に強かった20名と実施することとした。20名全員が寝たきりの暮らしをしていたため、ベッドサイドでの関わりとなった。当初は2014年度からの実施開始を予定していたが、実践希望者の中に、病気のため次年度での実施が難しい方がおり、前倒して2013年後半より実践を開始した。この点は、研究開始当初より予想されていた点であり、できる限り、実践希望者のタイミングで開始・終了できるように準備を整えた。

(3)20名との「見える物語綴り法」の探索的実践：20名の詳細なニーズは各々異なるが、参加者すべてが、写真と動画を用いた方法を希望された。手順としては、まずベッドサイドで参加者の自発的なナラティブを聴き取る。そして、その日の語りに添えたい写真や

動画を伝えてもらう。それから期間を開け、語り手のニーズに沿うような視覚媒体を筆者が現場へ出かけて入手する。それらを次回の実践日に持参し、語り手本人に確認を取る。それらから派生して、さらに語りを重ねていく作業が繰り返された。語りはすべて筆記によって記録が取られた。各々の自宅において2週間～1ヶ月に1回のペースで行われ、研究期間中、一人につき39～92回（延べ1,112回）実施された。「自分の人生でもっとも重要な出来事」の語りから始め、時間軸を前後しながら自発的な語りにかませて物語を紡いでいった。20名とも沖縄戦の体験から語りが始まった。戦中の頃の話に至ると、沖縄戦で亡くした大切な人との思い出が語られた。事実検証的な聴き取りではないため、本人が語りたいことを語りたように語ってもらった。本人の内的体験（体験に伴う感情面）に焦点を当てた聴き方をした。

(4)A（享年91歳）との実践：実践例を一つ挙げる。計87回の実践を通して、写真と文字を用いた自分史724頁が作成された。



図1 「見える物語綴り法」によるAの作品（本人の許可を得て掲載）

夫は戦死、子は沖縄戦で殺められ、自責の念を抱え独りで生きてきた。沖縄戦体験の語り始まり、砲弾の飛び交う中を逃げ惑った場所や出会った人、幼少期に通った学校の当時の写真などを見ながら物語が綴られていった。戦後は葛藤を抱えながらも米軍基地で就労し、食堂を開業したいという夢を60歳で叶えた。沖縄戦で味わった痛みは一時も消えることはなかったが、70歳頃から「生かされていることへの感謝」「生き抜いた・商売をやり遂げた自分への誇り」を感じるようになったことに、本実践を通して次第に気づいていった。

(5)完成した作品は、本人の自室に飾られたり、孫などの家族に託されたり、人によっては箱に納められたりしていた。

(6)今後の展望：未だ20例しか実践できていないため、新しい方法論として提示するた

めには、実践例をさらに蓄積する必要がある。ただし、1名の実践に対し、どのぐらいの時間がかかるのかを予想ができないという点は本実践の難しさであるかもしれないし、面白さでもある。

「可視化すること」が本人の語りを深め豊かにしていくという実感はあるものの、その効用について実証できていない。今後は、可視化の有無などの個人内比較を行い検討したい。この実践方法を、「見える物語綴り法」と名付けていることから、可視化による効用を明らかにすることは、優先して取り組むべき課題である。

予備的研究として、高齢者福祉施設の従事者への調査も実施した。沖縄戦のことを語る施設利用者は非常に多いことと、従事者たちが戦争体験の語りをどのように扱ってよいのか戸惑いを感じていることが明らかになった。今後は、高齢者福祉施設の従事者や家族が実践できる支援方法として提示できるよう改良を重ねていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

吉川麻衣子 (2015) 高齢者福祉施設における沖縄戦体験の語りの実態調査—語りに対する施設従事者の対応と想いを中心に—, 沖縄大学人文学部紀要, 査読有, 17号, 77-83 頁

[学会発表](計 3 件)

吉川麻衣子, 自発的なナラティブを活かす「見える物語綴り法」の開発 終末期の沖縄戦体験者の抑うつ度と語りの変容を中心に, 日本心理臨床学会第 34 回秋季大会, 2015 年 9 月 18~20 日, 神戸国際会議場・神戸国際展示場・神戸ポートピアホテル (兵庫県神戸市)

吉川麻衣子, 沖縄戦体験者の回想の質とレジリエンス, 日本心理学会第 78 回大会, 2014 年 9 月 10~12 日, 同志社大学 (京都府京都市)

吉川麻衣子, 語らうことと戦争体験の捉え方の変化との関連—「沖縄戦体験を語らう会」継続参加者 24 名の縦断的調査を通して—, 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, 2013 年 8 月 25~28 日, パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市)

[図書](計 1 件)

吉川麻衣子 (2015) 臨床研究における方法論をめぐって 「共創」という視点, 村山正治 (監修)・井出智博・吉川麻衣子 (編), 心理臨床の学び方 鉅脈を探る, 体験を深める, 創元社, 総 210 頁 (43-63

頁)

[産業財産権]
○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉川 麻衣子 (YOSHIKAWA, Maiko)
沖縄大学・人文学部・准教授
研究者番号: 80612796

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし